

問題

第1問

財市場における総需要 A が以下のように定式化されている。

$$A = C + I + G$$

【 C ：消費、 I ：投資、 G ：政府支出】

ここで、消費 C を以下のように定式化する。

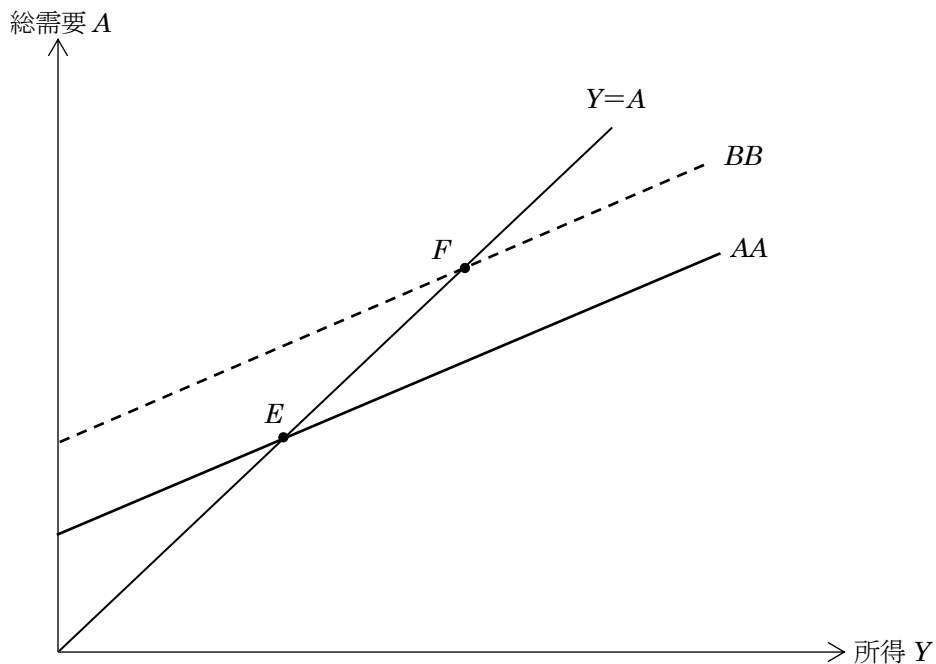
$$C = C_0 + cY$$

【 Y ：所得、 C_0 ：独立消費、 c ：限界消費性向（ $0 < c < 1$ ）】

このとき、総需要は $A = C_0 + cY + I + G$ と書き改めることができ、総需要線として下図の実線 AA のように描くことができる。

下図の45度線（ $Y = A$ ）は、財市場で需要と供給が一致する均衡条件を示しており、実線 AA との交点 E によって均衡所得が与えられる。なお、簡便化のために、限界消費性向 c は0.75であると仮定する。

このような状況をもとに、下記の設問に答えよ。



（設問1）

政府支出乗数と租税乗数の値として、最も適切なものはどれか。

- ア 政府支出乗数と租税乗数はともに4である。
- イ 政府支出乗数と租税乗数はともに5である。
- ウ 政府支出乗数は5、租税乗数は4である。
- エ 政府支出乗数は4、租税乗数は3である。

(設問2)

いま、他の条件を一定として、 $I+G$ の値が外生的に5増加し、図中の実線 AA が破線 BB へシフトし、点 F で均衡するものとする。このとき、均衡所得の変化量として、最も適切なものはどれか。

ア 4 イ 15 ウ 20 エ 30

第2問

有効需要の原理に基づき、総需要と総供給との関係から均衡GDPの決定について考えてみよう。まず、総需要ADが消費支出Cと投資支出Iから構成されるモデルを想定し、消費支出と投資支出がそれぞれ、以下のように与えられている。

$$C = C_0 + cY$$

$$I = I_0$$

C_0 ：独立消費、 c ：限界消費性向、 Y ：国内所得あるいはGDP、 I_0 ：独立投資

いま、下図のように、縦軸に総需要、横軸に国内所得（GDP）を表すとすれば、所得水準とそれに対応して計画された総需要との関係はADとして描かれる。

AD線の説明として最も不適切なものはどれか。

- ア AD線の縦軸の切片は、 $(C_0 + I_0)$ に等しい。
- イ AD線の傾きは限界消費性向に等しい。
- ウ 限界貯蓄性向が小さいほど、AD線の勾配はより穏やかになる。
- エ 独立消費が減少すれば、AD線は下方にシフトする。
- オ 独立投資が増加すれば、AD線は上方にシフトする。

